

オンライン講義の可能性について

荒木, 正見
総合文化学会 : 哲学、倫理学、比較思想

<https://doi.org/10.15017/5068313>

出版情報 : 総合文化学論輯. 16, pp.131-136, 2022-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 : Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



研究ノート：

オンライン講義の可能性について

荒木 正見

はじめに

新型コロナ禍という歴史的な事件において社会全体が、感染を食い止め、生存を目指して、様々な試みを行っている。教育現場においても試行錯誤が繰り返されているが、なかでもオンライン方式は新しい教育方法として目覚ましい普及を遂げている。その長所に気づいた教育機関によっては、もはや感染症の終息以降においても教育現場での利用を考え、オンラインブースの設置など高額の設備投資も始まっている。このような動きに対して、2022年3月22日の文部科学省事務連絡（周知）では、新学期を迎えるに当たって、「豊かな人間性を涵養し、人格の完成を目指す上では、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流も重要な要素」とし、非常時の特例として認められるオンライン授業に関しては「今後も、感染症や災害の発生等の非常時において、本来の授業計画において面接授業の実施を予定していた授業科目に係る授業を予定通り実施することが困難な場合」とし、「当該遠隔授業等は、いわゆる同時性又は即応性を持つ双方向性（対話性）を有し、面接授業に相当する教育効果を有すると認められるものである必要がある」とそれまでのコロナ禍を睨んでの遠隔授業を前提としつつ、対面授業を推奨している。しかし、その表現からも文科省の苦勞が推測できるように、コロナ禍も今後も with コロナと言われるように完全な終息の見通しも立たないし、各大学がオンライン授業を柱に様々な工夫してきたことも大学の自主性を配慮してその表現も感染症対策に限定するものではなく一般的な非常時も含む可能性を開いている。

また一般に、新しいシステムにつきものの無知ゆえのアレルギー反応に始まり、過剰な期待ゆえの失望など、ネガティブな反応も耳にするが、それゆえにこそ、この方法の長所短所を理解し、有効な利用方法を考えなければならない。

筆者も諸事情からオンライン講義を行っているが、新しい教育アイテムとあって、実践している各校の諸先生方にご意見を求めたり、内外の文献を参照したりした。その延長線上において、筆者なりに行った内容をまとめて骨組みだけでも公表し、資料として示してくれないかというご依頼を受けるまでに至った。

本来、考察すべきは多岐に亙るが、その一端として筆者が主に関わっている大学や専門学校の一般的な「講義形式」の授業に限定して、先の通知を意識しつつオンライン方式を導入して行なった教育成果を追求する試みと今後の可能性について簡潔に報告したい。

1. オンライン方式の講義

教育現場において多く用いられているシステムは Teams や Zoom が挙げられる。各校をキー局として教員・学生などの手元のパソコンと繋ぎ、相互交流を行うことができる。

各校のオンライン利用についての現状を調査するとさまざまな理由において導入されていることが理解される。

その第一には、時間的経済的理由である。運営費に苦勞している各校にとって学生に対する教育の機会均等を考慮すればオンライン方式は合理的な方法である。非常勤講師の通勤費用や通勤時間、学生の通学費や通勤時間を節約することができる。非常勤講師を得にくい地方大学や通学距離の長い首都圏の大学は重宝しているし、海外の講師を雇用することも可能である。企業がこのような合理性を求めてテレワークを導入していることと並行して各校も教育効果を検討しつつこのような合理性を追求する時代に入ったと言えよう。

第二には、当然ながら感染症の予防である。先の事務連絡ののちに新型コロナは第7波としてわが国に蔓延した。三密を避けるという基本的な予防法も教室という環境では満足な予防は行い難い。感染者の発生に伴って教員、学生のすべてが自室の手元パソコンで授業できるという環境はその点確かに気分的には安堵できた。また特にこの方法はPCR検査が陽性になって自宅待機を余儀なくされた学生も欠席しないで済む。また、感染症に限らず何らかの事情で教室に行くことができない教員、学生においても同様に合理的な方法だと言える。

以上のような事情で、各校はその都度の事情に応じて対面授業とオンライン授業を使い分けながら授業を遂行している。当初は感染症対策として止む無く導入したオンライン方式は、教育アイテムとして認識し直され、各校はコロナ終息後も利用できるだけは利用しようという方針で、設備投資をして学生ホールにオンラインブースを設置するなど、新しい教育アイテムとして定着しつつある。

ここで基本的に必要なことはパソコンワークに習熟することである。機能的に完璧なパソコンであれば慣れればよいが、メモリー不足などの不完全な要因があれば接続できなかったり、映像がフリーズしたりする。このような可能性を含めての危機管理が問われる。

では、各校における授業において、オンライン授業の適不適はどのように考えればよいだろうか。

文科省事務連絡からも伺い知ることが出来るように、対面授業にはそれなりのメリットがある。登校することで得られる教師・友人などとの総合的な人間的関りはその典型である。

授業に関して言えば、一般的な対面授業は、特に、小中高等学校のような管理的要因の強い教育現場や、学習のモチベーションが低い学生生徒を対象とする場合には有効で、それらの場面では対面でしっかり管理しなければならない。対面授業に固執する指導者は学生の自主的な集中力の育成よりも、いわば上からの拘束によって学生諸君を整然とした受講態度へと導こうとしているともいえるし、その現場の学生諸君はその程度のモチベーションであるともいえる。

さらに、通常の対面方式の授業では同じ空間における双方向的な肌のふれあいが特徴として挙げられる。この肌のふれあいは、それなりにメリットデメリットがあるが、ゼミや実習のように指導者が学生に対して密接に関わらなければならない形態の授業はやはり対面方式がふさわしいであろう。

これらに対してほとんど一方的に語る「講義形式」の大学等の授業はオンラインの可能性を開くと言える。しかし、オンラインならではの教育効果を上げるためには、状況に応じたさまざまな工夫が求められる。以下、筆者なりに試みてきたその工夫の一端を述べる。

2. オンライン講義の工夫

オンライン授業といっても、録画した授業時間分のデータを流し各自自己都合で早送りなどしながら視聴するというものさえあるが、今回は素朴に、講師は別室でパソコンに向かって講義し、学生のほとんどは教室においてモニターで受講するか、感染症の陽性反応が出たり、その他健康面に問題を抱えたりなど事情がある学生は自宅等別室でパソコン受講するという形式で行った。いわば最も基本的な形式であると言える。

一方的に喋る講義の場合、対面式の授業の長所としては、先述のように学生に対する管理要因が挙げられる。ADHD 気味の落ち着きのない学生を注意したり、集中力の限度を超えて居眠りやよそ見、スマホなどの学生の疲れ現象を見計らって、緩い話を交えて時間を稼いだりなど、講師にも管理的な態度が要求される。かく生理的要因もあるので、講師がモニター越しに教室なり自宅なりの学生に、単に対面と同じく講義したのでは、学生は更にルーズに振る舞ってしまう。授業効果を上げるためには工夫が求められる。

そこでこのたび利用したもののひとつがリトリバル学習法である。オンライン授業は、講師の身の回りの情報が少ない分、集中しやすいし集中力の訓練になるということは学生の授業後の感想にも記されていた。

そしてこのたび、オンライン授業を行うにあたって、あれこれ調べて有効な方法を実践してみた。なかでもリトリバル学習法をアレンジした授業方法は成果を上げることができた。一般的に、「retrieval」は、取り戻す、名誉回復、損害補填などの意味があるが、学習法としては「思い出し学習」と呼ばれるもので、周知のように、何事につけても「思い出す」という脳の作業をすることが記憶力を高めると理解されてきた。

このような学習法についての研究で定評があるのがスタンフォード大学である。同校はオンライン教育をも意識しつつ脳科学の立場からのさまざまな学習法を提起してきた。スタンフォード大学オンラインハイスクール校長・星友啓氏は主に中高生向けの学習法としてその一端を平易に各所で公開しているが、筆者はそれらを参考にしつつ、大学や専門学校での当該学生を考慮しつつアレンジして教育現場で生かしている。（参考文献の一例：星友啓『結果が出る最強の勉強法』光文社・2021）

このたび行ったのはテキストもしくは詳細な配布資料に対して、授業中に補ったことを

メモして、後でそれを利用して思い出しつつ講師が口頭で補った内容を、キーワードごとに文書にまとめるという技法である。この方式は新型コロナ対策の一端としてすでに対面授業で、授業を60分程度で切り上げ、あとは学内に分散してレポートを仕上げるという形で、実践してきたが、特にオンライン講義で効果があることを実感した。先に文科省事務連絡でも言及されていた双方向的な関わりも、このレポートを媒介としてその都度の理解レベルを測り、質問や感想も付記してもらいそれらに次回以降の授業で言及することで、教室で漫然と触れ合う以上の情報を得ることが出来る。さらにこの技法は、筆者が教える学生のほとんどが医療職を目指すものなので、電子カルテ時代になってカルテ記録技術に生かせる訓練にもなれば、という思いもあったし、学生諸君の授業後の感想にもそのスキルが身についたと述べられていた。

なお、前掲書では、「リトリバル」を、「ノートや教科書を見直して答えを探すのではなくて、自分の頭だけを使って関連した記憶を取り出す。」(『結果が出る最強の勉強法』126頁)、と述べられているが、同時に「記憶の定着だけでなく、学んだことを整理する「まとめる力」や他の問題に当てはめて考える「応用力」にも非常に優れた方法」(『結果が出る最強の勉強法』129頁)とも述べられている。一般的にも高齢者施設などでお互いに昔話を発表し合うなどといった応用例も耳にするが「思い出す」という脳の働きは今後も様々な可能性を探るべきであろう。

このようなことを前提にして行ったのが先に述べた方法であるが、大学レベルの講義の場合は情報量が多く、全く手掛かりもなく手ぶらでただ聞いたことを後でレポート化するというのは無理なので、いつでも立ち還ることが出来る最も基本的な情報としてテキストや資料を用い、それにさらに口頭で付加する情報についてはメモをとり、思い出しについてはそのメモの内容を基にして、付加した情報を、関連するキーワードごとに整理してレポート化するという方法をとった。

一方、集中しやすいだけに、疲労も強い。心理学的にも人間の集中力は50分～60分が限度だと言われる。オンラインといっても、多くの場合は講師と感染症陽性者、濃厚接触者は自宅等別室で参加するが、多くの学生は教室のモニターを見るという形式なので、密を避けるというコロナ対策も考えて、授業時間の拘束は早めに切り上げて、のちに各自自由に分散してレポートをまとめるという形式をとったのは、集中して疲れるからという理由もある。

それにしてもその間中、集中してメモを取るわけで、特にまじめになんでもメモしなければと頑張る方は、学生の感想にもあったように疲れるものである。リトリバル学習は要点を聞き分けて的確にメモし、後で思い出しながら正確に文章化するようにできればよいのだが、これも訓練が要る。先に述べたように、授業ではその訓練をしていずれカルテ記録において生かせるように意図した。

このように毎回レポートを提出し、それを毎回評価するというのは講師にとって負担であるが、学生の習熟度が確実に分かり、学生からの感想・質問等も相互交流できることは対

面学習以上に情報交換が可能になり、効果的であったし、学生の習熟度は学生自身の感想にもあったようにぐんぐん増していった。講師としても資料を充実したり、毎回のレポートから理解度を測ったり、節約できる通勤時間以上の努力が求められたが、多くの学生はそれに応えて努力し、レポートの最後に任意で書いていただいた感想の多くは充実した時間を送ることができたと述べられていた。

また、リトリバル学習の思い出し成果を測る手法としてはほかにテストを行うという方法もあり、実践してみたが、レポート化に比べて授業中の集中力が維持しにくいようで、いわば油断してしまって 8 分の 1 程度の学生は成果が認められなかった。やはり、レポート方式の方が効果的なようである。

このように形式的な工夫はほぼ成果を上げたと言えるが、対面授業の長所を意識して内容においても工夫した。対面授業の長所の第一は先にも述べたように管理的側面であるが、これについてはこれまで述べてきた方法で乗り越えることができたと言える。むしろ対面授業以上に緊張を維持し集中力を高めないとメモはとれないしレポートも書けない。

次に、対面授業の第二の長所は人間的な肌の触れ合いが挙げられるが、これをオンライン授業で得るとなると授業内容で工夫しなければならない。

このたび工夫したのは、学生の多くが医療職をめざすことを考え、筆者が医療系の幾つかの大学で特に管理職として経験したことで授業内容の例にふさわしいものを取り上げて挿入した。対面授業では講師自身の経験を語るのはリアルすぎて時には嫌味になりかねないが、その点オンラインでは適度な距離があり、講師に親近感を持ってくれたという感想も頂いた。

3. 今後の課題

このようにオンライン講義という最も基本的な場面で行った工夫について述べたが、当然ながら授業というものは多種多様でその都度効果的な方法を模索しなければならない。

その場合、授業の目的に沿った方法を考えるとともに、学生の状況を的確に捉えて対応することを忘れてはならない。対面授業に固執する方々には、単なる新しいものアレルギーの方も見受けられるが、一方、日ごろ接している学生の学習意欲が乏しいことが気かりで、徹底的な管理を行わなければならないと感じている方も多い。確かにこの点はその都度の課題である。筆者は筆者なりにリトリバル学習をアレンジして対応したが、自分の教育すべき内容や教育方法を前提としつつ、学生の志向性や能力などを検討し、具体的な方法を編み出していかなければならない。そのためには、オンラインという新しいアイテムが社会全体に普及し始めたばかりという現在、教育のそれぞれの領域において、自ら経験したことを公表しあって研究を深める必要がある。今後オンラインという方法ひとつとっても広く深い研究が求められる今、多くの皆様のご自分の工夫をぜひともお知らせ願いたい。

[On Possibility of the Online Lecture]

[ARAKI, Masami・総合文化学会・哲学、倫理学、比較思想]